

俺、女体化したので、

理想のビッチになっちやいまあ〜す♪

第二話 幼馴染と女友達もビッチ化

犬文庫 026

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。

## 登場人物

来栖 悠（くるす ゆう）

本編の主人公。

井口 麻由美（いぐち まゆみ）

悠の幼馴染。三つ編みおさげ。一人暮らしの悠の世話をしてくれる。地味。気が小さい。

樫渕 瞳（かしぶち ひとみ）

悠の隣のクラスで委員会が同じ。ギャルっぽい。気が強い。

猿橋 敬（さるはし たかし）

悠の親友。ガツシリした体格。黒髪短髪。地黒。悠同様ビッチ好き。

須田（すだ）

悠のクラスメイト。オタク。ガリメガネ。

林(はやし)

悠のクラスメイト。坊主頭。田舎者っぽい。

土肥 明美(どい あけみ)

悠のクラスメイト。正義感が強い。

山野辺 正(やまのべ ただし)

悠のクラスの担任。四十代。柔道部顧問。独

身。大柄。

前回のあらすじ

そこそこイケメンの学生来栖悠は、病的なほどの極端なビッチ好き。幼馴染の井口麻由美や女友達の檀渕瞳と体の関係を持ちつつも、彼女達は理想とする浮気しまくりクソビッチとは程遠く、真剣に付き合いたいと思える相手では到底なかった。どこかに理想的なビッチはいないものか。そんな風に、悠は悶々とした日々を過ごしていた。

ところがそんなある日、目覚めると悠は女の体になっていた。本来ならショックを受けるところだが、悠はこの体を駆使して自分が理想のビッチになればいいと、いとも容易く受け入れてしまう。

クラスメイトの男子達に、申請してくれれば誰とでもエッチさせてやると堂々宣言する悠。宣言通り見境なくヤッてヤッてヤリまくり、初

めて食らう男の体に、初めて女として味わう性の悦びに、悠は魅了されて夢中になる。

親友の猿橋敬ともセックスをし、一時は彼の彼女になり彼だけに永遠の愛を誓うが、平気で軽うく浮気して他の男と簡単にセックスしてしまふ。やっぱりそんなの無理でしたあゝ♥  
ということ、悠は改めて男食いまくり最低クソビッチ道を邁進すると誓うのだった。

あたし、チンポやりまくっちゃいまあゝゝす



某学園の、インターネット裏掲示板。その学園にまつわる、良からぬ情報や不穏な噂話等が多数書き込まれる、ネット上の吹き溜まり…。

意外にも、この場所を知っている学園生は多い。ストレス発散のためか特定の生徒への悪質な誹謗中傷を書き込む者が目立つが、その一方で、この場所を不埒な出会いのきっかけにしようと企む者達も一部存在した。画像や動画をアップすることも出来るので、ここは健全な青少年達の学園にあるまじき、学園生専門のいかかわしい出会い系サイトとして機能してしまっていたのだった。

乳房や性器を大胆に露出させた動画を、堂々公開する女子生徒も少なくない。今日も、その手の動画が一つアップされた。だが、興味本位でその動画を見た男子生徒は、おおいに度胆を抜かれることだろう。その動画は、他のものと

は明らかに違っていたのだ。

再生して、最初に映し出されるのはとある男子生徒の画像だった。中々のイケメン。耳を覆う男にしては長めの茶髪と、端正な目鼻立ち。それなりにモテるであろうことが容易に推察される。そんな彼の写真が何枚か、連続して映される。学園の制服を着ているもの。私服姿のプライベートなもの。十パターンくらいそれが続き、画面がいきなり切り替わる。そこから通常の動画になったのだ。

現れたのは、学園指定のスクール水着に身を包んだ、女子生徒だった。だが、ただの女子生徒ではない。さっきの写真の男子生徒と同じ髪、同じ顔、同じ体をした、信じられない話だが、彼と同一人物だったのである…。

『はあく〜い♥元イケメン男子♪現ヤリマン  
ビッチ♪○年○組、来栖悠ちやんでえ〜す♥  
きやはは♥あ・た・しい〜♥オフパコ相手絶賛

募集中でえ〜〜つす♥♥♥』

性別は変わっている。声も甲高い完全な女性  
のものだ。だが、確実に同一人物である。きつ  
と誰が見ても、先程の画像の男子と、この動画  
の女子が、同じ人間だと、直感的にわかるはず  
だ。ありえないことだが、それは誰の目にも明  
らかな自明の事実なのだった…。

『あは♪学園の男子なら、誰でも♪本当に誰に  
でも♪ヤラせてあげちゃいまあ〜〜す♥パコ  
らせてあげちゃいまあ〜〜す♥悠ちゃんのこ  
の体、軽う〜く食べさせてあげちゃいまあ〜  
す♥うふふ♪どおく？エロおくいつしよ？悠  
ちゃんのこの体エロおくいつしよ？きやは  
は♥食べたあ〜〜いでつしよおく〜お？』

カメラを正面に捉えて直立した、スクール水  
着姿の彼女は、見る者を露骨に煽るような動き  
をしてみせた。水着の中で爆発しそうなほど豊  
満なバストを、面白おかしい感じでぐにぐにと



両手で揉みしだき激しく変形させる。あるいはスラツと伸びた肌理の細かい白い脚に撫でるように指先を這わせ踊らせ、とても性的に強調する…。

さらにはゆっくりじつとりそれっぽく舌舐めずりをして、上唇と下唇を妖しく濡らす。明らかに男を挑発する視線で、カメラをじつと見つめたまま…。

健全な男子生徒なら、間違いなく勃起してしまふ映像だった。この女子生徒が、例え元男だったとしても…。

『うふふ♪この悠の水着の下の超エロエロな体が見たあゝい、食べたあゝい、チンポぶち込みたあゝいっていう男の子は、下のアドレスまで遠慮なく連絡してきてね♪悠、本当に誰にでもお安くハメさせてあげちやうから♥さらにイケメンならなおのことよし♪うふふ♪悠ちん、元男だけど、イケメンもうクソ大好きな

の♡イケメンが大好物すぎてもうしようがないの♡あはは！やっぱあゝ♪あ、休み時間とかに、教室に直接ヤリに来てくれてもいいよ♪悠ちんのマンコ、常に濡れてるから♡常にびっしよんびっしょんに濡れてるから♡ソツコーでパンティーズリ下ろして勃起チンポずんぼりぶっ込んでくれて大丈夫だから♪あはは♡それでは、たくさんのチンポ♡お待ちしておりますあゝす♡かもんかもん♪ちんぽ、かもおゝゝゝん♡♡♡』

動画はそこで終わった。元男だというその女子生徒は、本当に幸せそうな笑顔を浮かべていた…。



四人の生徒が、学園への道を歩いていた。だが、通常の登校風景とは明らかに異なる。前を行く一人の女子に対し、他の三人は遠慮がちに少し距離を取って後ろから続くという形だった。後ろの三人がそんな風になってしまいうのも致し方ない。当然学園指定の制服姿の三人に対し、意気揚々と前を行く女子生徒は、全然違う異様な服装をしていたのだから。

「あはは♪やっべ！マジやっべ！俺、ついにやっちゃうんだ！この格好で学校に行っちゃうんだ！あはははは！やっべ！ああん♥もう超やばいんですけどお〜〜♥♥♥」

集団の先頭に行く女子生徒：元男子生徒の来栖悠は、最後の文言を露骨に甘い女の声色で放った。自身で言う通り、悠は異常なくらい興奮していた。それもそうだろう。本来は折り目正しい制服姿で向かわなければならぬはずの学校に、彼女は今から、セクシーなボディコ

ン姿で行こうとしていたのだから。

悠が着ていたのは、シツクなグレーの、無地のボデイコンワンピースだった。オフショルタ  
イプで、白い肩が丸出しになっている。色的に  
は地味で、素材もポリエステルの安物だが、サ  
イズが小さく、体にぴったりフィットして吸い  
つくようにはりついて、そのムチムチの体のラ  
インがはっきりと浮き上がっていた。大きなバ  
ストとヒップの形が、とにかく目立つ。丈も短  
く、肉付きの良い生の太腿が大胆にも剥き出し  
になって、今にもパンツが覗きそう。そして飾  
り気のないシツクな色とデザインが、余計な着  
色をせずにその肉体の豊満さだけを素直に強  
調していて、かえってエロい。

茶髪ショートボブの、どこか軽薄なギャルっ  
ぽい彼女がそんな姿で歩くものだから、匂い立  
つ色香は甚だしく、朝の街を行き交う通行人や、  
同じ学校を目指す生徒達から、否応なく注視さ

れることになる。

「あはは♥はあ〜い♪あたし、この姿で今から学校行っちゃいまあ〜す♪やっちゃいまあ〜す♪タブーにガツツリ挑戦しちゃいまあ〜す♪」

悠はそれらの視線にわざわざ手を振って応じる。その表情は、嬉しくて嬉しくてもうどうしようもないという様相だった。悠は自ら演出した非日常に、尋常でないほど昂揚しきっていた。

普通の男だった悠が、ある日突然女に変身してから約一か月。彼女は女としての生活を真正面から楽しみまくり、理想のビッチへの道を邁進していた。そして本日いよいよ、洒落にならないゾーンへと踏み込もうとしていたのだ。た…。

「な、なあ悠…さすがに不味いんじゃないか？」

後ろから、猿橋敬が心配そうに声をかける。

ガツシリした体付きで、短髪地黒の精悍な男子。男時代からの悠の親友であり、元彼氏でもある。悠が女になってからはエッチもしまくり、現在の関係は、仲の良いセフレといったところだろうか。

「ん、なにが？なにが不味いんだよ、敬？」

悠は慣れた男言葉で敬に聞き返す。

「いや…だってさ…さすがにその服装で学校に行ったりしたら…停学とかさ…下手したら退学に…」

「大丈夫大丈夫！俺みたいな超特殊なマイノリティーの生徒を退学にでもしてみろ？むしろ差別的なものを勘ぐられて、学校の方の立場が危ういことになるんだって！先公になんか言われても、そっちの方向で攻めれば大丈夫だよ、きつと！それに、例えそういうことになつたとしてもな、俺もうこの格好で学校行きたくて仕方ねえの。男子のみんなに俺のこのえんろ

お〜い姿見せたくてもうしようがねえの。あ  
はは♪悠ちゃんもう我慢出来ないのお〜ん  
♥あつはあ〜ん♥うっふう〜ん♥いんや  
あ〜ん♥待っててねえ〜男子のみんなあ〜  
〜♥きやはははは！」

「……………」

「はあ…………猿橋…あんたさあ…本当にこれで  
いいわけ？」

言葉を失う敬に横から声をかけたのは、同行  
する檀渕瞳だった。ふわっと毛先をカールさせ  
た、お洒落なライトブラウンのセミロングヘア  
ーの女の子。色は白いが、全体的に派手でどこ  
かギャルっぽい。悠とは、委員会が同じことで  
知り合い、そこから友人のような関係が続いて  
いる。男時代には、肉体関係もあつた。

「もう彼女じゃないのかもしれないけどさ…  
一度はそういう関係だったわけでしょ、悠と？  
…その子が…こんな…本当にクソビッチで…

いいの：あんた？」

至極真つ当な疑問だった。敬は。

「いや、それはいいんだよ、全然」

その点に関しては、きっぱりとそう答えたのだった。退学になるのはさすがに不味い。だが、悠がビッチであることについては全然厭わない。むしろその方が好ましい。

それが、以前から一貫した敬の姿勢だった…。

「……………」

敬には迷いはなかったが、瞳としては常識的に考えておいそれと受け入れられるものではない。彼女は、唯一立場を同じくするもう一人の同行者に助けを求めた。

「麻由美：おかしいよね…：こんななの？」

井口麻由美は、恥ずかしそうに肩をすくめながら歩いていた。時代遅れの三つ編みおさげ髪が特徴的な、外見の印象通りの地味女子。悠とは昔からの幼馴染で、瞳同様男時代には体の関



係を持っていた。

共に悠に対して恋心を抱いていた瞳と麻由美は、悠が女になり、敬と付き合うことになって完全に彼女とは疎遠になっていたのだが、その恋人関係が解消されたことをきっかけに、また行動を共にするようになっていた。

彼女達は悠と同性になってしまったのだから、悠がフリーになったからと言って、その路にチャンスが巡ってくるわけでは決してない。だが、やはりそう簡単に思いを断ってしまえるわけでもない。結果、二人は近くで悠を静かに見守るような、不思議な距離感に立つことになっていた。

だが、その場所で見せられるものは、想像を絶していた。彼女達の思い人は、とんでもないクソビッチになってしまったのだから。愛する男性の変わり果てた姿に、二人の胃はキリキリと痛んだ。

「うん…でも…」

瞳の問いに、麻由美が意を決したように答える。

「私は…悠くんの傍で…悠くんを…見守るつて…決めたから…」

前に行く悠には届かない、小さな声で。

「……はあ」

瞳はため息を漏らす。

「あはあくん♥待っててねえ〜男子のみんなあ〜♥ドスケベセクシーボディコン悠ちゃんが、今すぐみんなのチンポを勃起させに行っちゃうからねえ〜くん♥きやはははは♪」

二人の壮絶な気苦労など知らず、一種躁状態になった悠はノリノリで叫んだ…。

※※※

「ひゅーひゅー！」

「いいぞ！もつとやれー！来栖ー！」

朝のホームルーム前の教室。席に着いた男子生徒達が、スケベそうにだらしなく頬を緩めて囁し立てる。ボディコン姿の悠が、教室の前、教卓のところまで、卑猥なセクシーショーを開催していたのだった。

「あっはあくん♥うっふう〜くん♥ああくん♥見て見て〜♥悠をもつと見てえ〜♥えちえちの悠ちゃんをもつと見て見てえ〜くん♥うっふう〜くん♥」

シツクなグレーのワンピース姿の悠は、浮き出たバストやお尻の線を両手で妖しくなぞりながらくねくねと体をくねらせ、居並ぶ男子達を露骨に挑発する。飾り気のない地味なデザインのワンピースだからこそその、落ち着いた大人の芳醇な色香が、これでもかというほどに匂い

立っていた。さらにあからさまに艶っぽい視線や表情を一人一人に丁寧に向けていき、思春期の色ボケ男子を狙い撃ちにする。

エロボディコン姿で登校するというある種のテロ行為に出た悠は、運良く教師に一切遭遇することなく教室まで辿り着くことに成功していた。そして間髪置かず、この淫猥なショーを始めたのだった。

「いいぞいいぞ！来栖最高！ぎやははは！」

「もつと！もつとやれよ！もつとエロいことやれよ！俺達を喜ばせろよこのクソビッチ！」

「そうだそうだ！そんなもんじゃねえだろ！もつとサービスしろや！お前はこのクラスの性処理人形なんだからよ！」

「ああくん♥いやあくん♥クソビッチ…性処理人形だなんて…そんなあ…はあん♥…その通りですう（笑）♥ううくん♥悠はこのクラスのみんなの勃起チンポ処理係のドスケ

べビツチですうくくん♡ああん♡だ：大好きな男の子達にそんな風に言われたら、悠：もう断れなあ〜い♡皆様のお望み通り：悠：もつとエツチなことしちやいまあ〜つす♡」

言いながら悠は、自らの背中に手を突っ込み、器用にブラを外してワンピースの中からそれを引っ張り抜いた。そして男子達の席に向かって無造作に放り投げる。

「きやはは♪悠ちゃんのブラジャーだよお〜♡そお〜くれ♡」

「あはは！ラッキー！もーらい！」  
飛んできたクラスメイトのブラジャーを受け取った男子が愉快そうに笑う。

「うふふ♡次は勿論……えいつ！」  
続けて悠は、ワンピースの下から両手を入れ、中が見えないように注意しつつも、ズリツと大胆にパンツを下ろした。二本の脚を通して体から外したそれを頭上に大きく掲げ、そして別の

男子に向けて例によつて投げてよこす。

「あは！来栖のパンツ飛んで来たよ！やべ！汚ねえ！それに女くせえ！ぎやはは！」

彼が受け取ったのは、ブラとお揃いの情熱的な真つ赤なパンツだった。意匠のないシンプルなデザインで、布面積が非常に小さく、後ろはほとんどTバック。そして性器に触れていた部分は、愛液でしとどに湿っていた。

「やあくん♥汚いなんて言わないでえ〜♥悠ちゃん超〜エッチな子だから、おまんまんからエロ汁がぢゅぱぢゅぱお漏らししちゃうのは仕方ないのよお〜♥」

「おらおら！んな御託はいいからとつとエロいことしろよ！」

「そうだそうだー！」

「ああん♥ごめんなさあく〜い♥今します♪すぐしますう♪」

きつめのリクエストに応え、悠はショーを再

開させる。伸縮性のあるワンピースの胸元を大きく下げ、乳輪が覗く直前まで男子一同に胸の谷間を公開する。あるいはワンピースの裾を焦らす感じでゆっくりとゆっくりと上げていき、大事なものが見えてしまう本当にギリギリまで白く艶やかな太腿を露出させる。教室中に、男子達の唾を飲む音が溢れる。

「はあくん♥どうですか〜？エロおいですかあ〜？悠ちやんのこのか・ら・だあく♥エロおいですかあ〜？」

「ぎやはは！最高にエロいよクソビッチ！」  
「ホントだよクソビッチ！この最低クソゴミビッチ！マジ死ねよクソビッチ！ぎやははは！」

「あくん♥クソビッチだなんて♥そんな♥そんな♥あくん♥」

（うわ…やべ…俺…元男なのに…クラスの男子みんなにビッチ便器扱いされてる…とんで

もない目で見下されてる…なんなんこの状況  
：マジで興奮する…ああ…ビッチ…ビッチ…  
あたしはビッチ…ぐっ)

悠にとって最高の褒め言葉が響き渡る。その  
言葉を浴びせられるだけで、悠は靦面に濡れて  
しまうのだった。

「いい加減にしなさいよ！」

その時いきなり、女子の怒声が響いた。悠の  
エロエロショーに大喜びの男子達の間で、女子  
達は皆、苦虫を噛み潰したような渋い顔で席に  
着いていた。ここ最近、教室での悠のこうした  
振る舞いが目立つようになり、その都度女子達  
は我慢を強いられていたのだった。元来大人し  
い子が多く、度を越したことをしてもみんな見  
て見ぬ振りを突き通していたが、とうとう堪忍  
袋の緒が切れたというところだろう。

席から立ち上がって抗議したのは、土肥明美  
という女子生徒だった。サラサラのロングヘア



ーで、大分背が小さいが、真面目で気が強い。少々融通の利かない、冗談が通用しないタイプでもある。

「来栖！あんたいい加減にしなさいよ！なに考えてんのよ！迷惑よ！教室でそんなことされちやあ！」

怒濤の先制攻撃に、悠は堂々としてすぐさま言い返す。強い男の表情、男の口調で。

「はあ？なに優等生ぶってんの、土肥？知ってんだぞ、お前優等生なんかじゃねえだろ。男時代の俺と遊びで普通にセックスしてたもんな？そんでその時は他のクラスにも二人セフレがいるって話してたっけ？今も続いてんの、そいつらと？お前、今もセフレと遊びのセックスしてんの？」

「なっ！」

土肥明美は絶句する。男子達は悪意に満ちたひそひそ話を即座に開始する。

「おい：マジかよ…」

「土肥ってそんな奴なの？隠れビッチってやつ？うわあ〜イメージないわあ〜：ちよつとシヨックなんだけど…」

「真面目そうな女なのに…」

「勉強も出来るんだろ？：親どう思うんだろうな…」

「くっ…」

土肥明美は途端にか弱い女の子の顔になり、涙を浮かべて走って教室を飛び出していった。彼女には悠に反論することが出来なかった。何故なら悠の発言は全て紛うことなき真実だったのだから。ちなみにそのセフレ達とは変わらず続いていて、つい昨日もその内の一人と遊びセックスしまくったばかりだった。

「あはは♥いえ〜い♥ビッチビッチ♥女なんてみ〜んなビッチなのよお〜ん♥み〜んなビッチになってパコパコしまくればいいの

よおくん♥きゃははは♥♥♥」

勝ち誇ったように大きく両手をあげて、それっぽいポーズを取る悠。

そこへ。

「おい、席につけ。ホームルーム始めるぞ…」  
四十代、柔道部顧問の、大柄な担任教師が教室に入ってきた。いつもより到着が少し早く、まだチャイムは鳴っていないかった。

悠は完全に油断していた。教卓のところではしゃいでいた悠は、担任と目が合ってしまった。制服ではなく、セクシーなボディコンワンピース姿という、学生にあるまじき、ありえない格好をした悠を見て。

「…く、来栖！ちよつと来い！」

担任は烈火の如き怒りを噴き上げた。

「きゃは♥やんばあ〜い♥」

絶体絶命の、危機的状况。それでも悠は、余裕の笑みを浮かべていたのだった…。



「なにを考えているんだ！お前は！」

空き教室に無数にある椅子の内の一つに座らされ、悠は真正面から担任の怒声を浴びた。もうとつくに一限目の開始時刻は過ぎている。クラスのホームルームもせず、自分が受け持つ授業も放擲して、担任は悠の説教のため時間を割いていた。悠がしたことはそれほどにとんでもなかった。だが見方を変えれば、担任がそれくらい自分の生徒である悠を慮っているともいえる。

「うふふふ♥」

そんな担任の親心など知らず、悠の表情には反省の色が微塵もなかった。

「おい！なに笑ってるんだ来栖！いきなり体がそんなことになって大変なのはわかる。だがな、絶対に守らなきゃいけない分別というものはあるだろう？そんな格好で学校に来るなんて、いくら事情があっても擁護なんてできんぞ！ええっ！」

「ええ〜？そんなにいけない格好ですかあ〜？この格好う〜？」

悠はいきなり椅子から立ち上がり、すぐ目の前に立っていた担任に正面から対峙する。そしてシックなグレーのワンピース越しにその豊かな肉体を両手でなぞるように撫でてそれっぽく強調する。あからさまに、彼にアピールするよう。

「あ〜そっかあ〜♥こんな風にくおっぱいやあ〜お尻が〜ムチムチのお〜えろえろに〜浮き出てるからあ〜♥とお〜つてもえっちだからあ〜いけないんですねえ〜♥せんせえ〜

♥わかりましたあ〜♥ゆう〜一つお勉強になりましたあ〜♥ゆう〜一つお利口さんになっちゃいましたあ〜♥教えてくれてありがとう  
「ございまあ〜す♥せ・ん・せ・い♥うふふ♥」

服の上からでも柔らかかさのわかるポリュミーな巨乳を持ち上げ、わさわさ揺らし、程良く引き締まったお尻をさすりながら下半身をくねくね踊らせる。加えてとろけるような甘い声を囁くように投げかける。担任の、すぐ眼前で。それは、明らかな挑発だった。

「くっ…そんなことを言ってるんじゃない。学校に、制服以外の格好で来るのがおかしいと言ってるんだ…」

「え〜？それってそんなにダメなことなんですかあ〜？うう〜ん…そっかあ〜…わかりました…じゃあ脱ぎまあ〜す♪」

「なっ！」

担任の目の前で、悠は驚くべき行動に出た。

いきなりワンピースを下から捲り上げて、そしてそのまま一気の動きで脱ぎ捨てたのだった。ほんの一瞬の出来事だった。そこには、寸毫の迷いも感じられなかった。

「はい、脱ぎました♥見てください、先生♥来栖悠、ちゃんと脱ぎました♥学校に着て来てはいけないお洋服、ちゃんと脱ぎました♥だから確認してください、先生♥それで褒めてください、せんせえ♥」

悠は担任の真正面で、気をつけの姿勢で立った。ブラとパンツは、先程のストリップショーで既に脱衣済みだ。従って、悠は今全裸だった。一糸纏わぬ全裸の女の肉体を、ぴしっとした正しい姿勢で担任に晒していた。そこには異様な倒錯があった。それをわかった上で悠は極端なほどのきつちりした気をつけをしていた。無論、担任への意図的な当てつけであることはいうまでもない。

「なっ、なにしてるんだ！本当になにを考えてるんだ来栖！」

「えええ〜？この格好がいけないって言ったの先生じゃないですかあ〜？だから脱いだんですけどお〜♥」

「バカ！だ、だからといって脱ぐ奴があるか！き、着ろ！今すぐ服を着るんだ！」

律儀なのか小心なのか、担任は視線を両腕で遮るようにして、女子生徒の裸を必死に見ないようにしている。その所作には彼の人となりがよく表れているように悠は思った。四十代、独身の、柔道部顧問。学生時代は有名な柔道選手だったらしい。大柄で、髪はシンプルなスポーツ刈り。全身から、無骨で野暮ったい雰囲気。むんむんと漂う。武道に青春を捧げるあまり、女性経験が乏しく、それがきつと今日まで続いているのだろう…。

こんな奥手な男など、自分の手にかかれればち



よろい。女の悠は、確信的にそう思った。

「…うふふ♥」

女狐のような狡猾な艶笑を浮かべ、悠は行動に出た。担任がこちらを見れないのをいいことに、彼の体に急接近し、立ったままストラックスの上から股間をがしつと鷲掴みにしたのだ。

「なっ！なにをするんだ、来栖！」

「うふふ…いいからいいから♥悠と…いいいこ・と♥しましよ？」

担任の股間は、この時点でもはや少し膨らんでいるように悠には思えた。

「くっ…やめろ…やめるんだ…は…離せ…来栖…」

担任は右手で依然視界を隠しながら、左手で股間の悠の手をどうにかして払いのけようとするが、悠にはどうも本気では拒絶していないように思えた。

そんな彼の心の隙間に付け入るように、悠は

次の作戦に出る。担任のそれなりに大きなチンポを、スラックスの上からにぎにぎなでなでと揉みしだきながら、あえて男の口調で、彼に囁いたのだった。

「…大丈夫だって、先生…俺…体は女だけど…心は男のままだからさ…さつきは女っぽい言葉で話してたけど…実は心は男なんだよ…男のままなんだよ…先生のよく知ってる…たまにバカ話とかもしてた…あの男子の…来栖悠のまんまなんだよ…」

「くっ…ぬっ…」

「だから…俺とエッチしたってな…女子生徒とヤツたことになんてならないんだって…どんなエロいことしたってさ…男子生徒と担任が…ちよつと悪ふざけしたことにはしかなんねえの…そんな悪いことしたことはないからねえんだよ…マジだよ、これ…だからさ…先生…俺と…エロいことしようぜ?…ふふふ…こ

れ：絶対罪になんねえから：ホントに：男同  
士でちよつと戯れてるだけ：マジで絶対罪に  
問われることなんてねえから：しかも：それ  
でありながら：先生は：現役JKの体を堪能  
出来る：現役JKの体を：食えるんだ：食つ  
ちまえるんだ：なんの罪にも問われないまま  
にな：うふふ♥最高う〜でしよ〜う？せ・ん・  
せ・い？あはは♥だから、しちやいませよ？悠  
ちゃんと：エ・ツ・チ♥しちやいませよお〜  
ん♥♥♥」

「はあ：ああ：んん：ゴクツ」

滅茶苦茶なロジックだった。いくらなんでも  
荒唐無稽すぎる。そんな理屈が通用するはずが  
ない。だが、担任の左手は抵抗する力を完全に  
失い、いつの間にかチンポもはち切れんほどギ  
ンギンに勃起していた。そして彼はもはやなに  
も言おうとしなかった。

それは、悠とエッチする意思を表明したも同

然だった。

（あはは❤️ちよれえ〜❤️男性教師クソちよれえ〜）  
（笑）❤️立派な教育者クソちよれえ〜  
（笑）❤️こんな簡単に堕ちるなんて♪こんな簡単にチンポビンビンのビコビコビンにおっ勃  
てて生徒とセックスしちゃうなんて♪マジで  
これが教育者かよ！これが若者を正しい道に  
導くべき教師かよ！恐ろしいな！ぎやはは！  
マジウケる！うふふ❤️いいのいいの❤️教師も  
生徒も、所詮は男と女なんだから！結局はチン  
ポとマンコでしかねえんだから！なくんも考  
えず！教師と生徒でバコバコにチンポマンコ  
しまくればいいんだよ！チンポマンコ擦り合  
わせまくればいいんだよ！なはは！すげえ！  
マジおもしろいわ！）

彼はきつと、スケベなボディコン姿の悠を一  
目見た時から、ビビッドにチンポを反応させて  
いたに違いない。悠はそんな風に思った。

悠は彼の股間の前に膝立ちになり、スラックスのファスナーとトランクスを下ろし、勃起したチンポを取り出した。担任はやはり全く抵抗を見せなかった…。

「のわっ！」

悠の口から、思わず間抜けな叫びが漏れる。スラックスのファスナーから飛び出てきた担任の一物が、あまりに見事だったからだ。ギンギンにいきり立ったズル剥けデカチンポ。太く、長く、野性味溢れるゴツゴツした形状で、早くも先走り汁で濡れ、蒸れた雄の匂いをふんふんと放っている。

（うわあ〜くせえ〜…美味そお〜♡にやはは♡このチンポくさくて超美味そう〜♡あはは！笑ける！では早速…いただきまあ〜す♡♡♡）

床に膝を着いた全裸の悠は、もはや一ミリの躊躇いも見せずそのチンポに口をつけた。まず

は必要以上に大きく下品に伸ばした舌で、亀頭をベロベロと舐めていく。

「べろおく…えろおく…んん…えんろおく…べんろおく」

「く…ぬっ…」

一舐め一舐めを大きく、ゆっくりと、じっくり丁寧な動きで行う。舌尖を通じて悠の口内に、こつてり濃厚な男の味が広がる。

（ああ…うんめえく…チンポ…このチンポうんめえく…ああ…俺…今…担任のチンポ舐めてるよお…はあ…四十代の…おっさんのチンポ…舐めてるよ…ああ…くっせえくっせえおっさんの不潔チンポ…もう余裕で舐めちやつてるよ…はあ…あはは…すげえ…ああ…うめえ…おっさんのチンポうめえ…おっさんチンポうんめえ…めっちゃ濃くて…香ばしすぎるよ…おっさんのチンポ…ああ…好きだわあ…やべえ…俺…元男なのに…ちよつと前まで…